

戦略型コース設計の思想と系譜 2 / Concept and Background of Strategic Golf Course Architecture, Part 2

英雄型デザインのルーツ

ゴルフジャーナリスト

西沢 忠

コース設計とは“コンター (Contour)”との闘いらしい。人間が自然の大地に、ボール・ゲームとしてのフィールドを人工的に造りながら、あくまで昔からそこにあったかのように自然に見せなければならない。“Contour”には輪郭、外形という意味に加えて動詞では“自然の地形に沿って造る”という語意がある。だからコース設計家はゴルフ場予定地の自然を活かして、醍醐味あるフィールドを創出しなければならない義務があるのだ。

ではその時、設計家の頭の中には完成時のホール・イメージが多彩に詰まっているのだろうか？

どうも、プレーして愉しく、攻略の醍醐味豊かなホールのオリジナル・パターンはそれほど数多くはなく、いくつかのパターンが自然条件で変化するだけのように思えて仕方がない。だからこそ設計家にはゴルフの本質的な意義や技術的な奥深さに対する知識が必要なのだろう。図面上でも泥だらけの現場でも、コンターと闘うための武器として。

そこで、設計家が目標としているテーマは“戦略的デザイン”である。最大多数のプレーヤーに最大公約数の愉しみを提供できるホール造形を常に模索しているのだ。

コース設計の思想変遷は“科罰型 (Penal School)”から“戦略型 (Strategic School)”へと移り、近代になって“英雄型 (Heroic School)”が派生して現代に至っている。そして、18ホールの中に三つの思想が混在するのがいいコース設計といわれている。

ここでは、その“英雄型デザイン”が派生されたルーツを考察してみたい。

#### “レダン”ホールの模写と分析

「戦略性こそこのゲームの魂で、ゴルフの精神とはハザードを恐れず、ハザードと折り合いをつけて報酬を刈り取ることだ」(Strategy is the soul of the

game. The spirits of golf is to dare a hazard, and by negotiating it reap a reward.) と言ったのは、『リビエラ』や『ベル・エア』を設計したジョージ・G・トマスだが、それより以前に“戦略性”について考えた米国人がいなかったわけではない。しかし夜明けはなかなかこない。

米国にゴルフが輸入された初期、19世紀の終わりにはそれこそ世紀末の様相で、今にして思えばとんでもないコースが量産された。俗に“幾何学的デザイン”(Geometric Design)と呼ばれる四角いグリーンやバンカーに、小山のマウンドを築いてブラインド・ホールを造ったり、円錐形の小塚(チョコレート・ドロップス)群などのオンパレードで、古い写真資料を見ると笑い出したくなる。当時、トム・ベンドロー(Tom Bendelow)という設計家はその手の仕事で一世を風靡したらしく、彼は家財道具一式を車に積んで各地を回り、一財産を築いたという。なぜ、彼が次々に仕事を貰えたかという、彼の口調にスコットランド訛りがあったからだったとか。

米国が手探りでコース造りをした世紀の変わり目にはそんな試行錯誤もあったのだが、手本はやはり英国にあった。英国出身のプロや設計家が米国に出稼ぎに来るか、逆に米国人が英国にコース造りの研究に行ったのである。そのフロンティアがC・B・マクドナルドである。

裕福な家系に生まれた彼は父親の勧めでスコットランドのセントアンドリュース大学に留学、トム・モリスの手ほどきでゴルフを覚えた。帰国して全米ゴルフ協会(USGA)設立を画策したり、全米アマ選手権をスタートさせたりとゴルフの普及に務めたが、最大の関心事はコース設計だった。ニューヨーク・ロングアイランドに『ナショナル・ゴルフ・リンクス』(National Golf Links of America)を1911年に設計したが、彼の著書“スコットランド・ギフト、ゴルフ”(Scotland's Gift: Golf)にもあるように、18ホールのすべてが有名なリンクス・ホールのコピー、またはレプリカだった。つまり、彼のデザイン発想はすべてリンクスに触発されたもので、戦略的ホールのオリジナルはリンクスにあると洞察していたのだ。

この思想は英国人設計家のアリスター・マッケンジー博士も同じで、「アメリカのゴルファーはマクドナルドに感謝すべきだ。彼は最初の全米アマ・チャンピオンであるばかりでなく、アメリカのコース設計の父でもあるからだ」(American Golfers owe a dept of gratitude to Charles Blair Macdonald, who was not only the first United States Amateur Champion but the father of

golf architecture in America.)と賛辞を送っている。彼は『セントアンドリュース』の会員時代からオールド・コースの地形を測量して図面化したり、各ホールの攻略ルートを研究した結果、設計の戦略性に到達した。医者だった彼がコース設計家に転進したのは、理想的ホール・デザインの懸賞付きコンテストに一等入選したからだが、それはマクドナルドが設計予定の『リド』(Lido)の地形をモデルにしたものだった。ふたりはリンクスの戦略性という絆でつながりがあったのである。だから、マッケンジーが晩年に、ボビー・ジョーンズと共同で設計した『オーガスタナショナル』でも“森の中にリンクスの名ホール”を再現しようとした結果だったのも納得がいく。

ところで、マクドナルドのリンクス模写で最も有名なのは『ナショナル・リンクス』4番ホールに取り入れた“レダン”だろう。エジンバラの東、イーストロジアンにある『ノースベリック・西コース』(North Berwick West Links)15番のパー3ホールである。このホールは今日までのコース設計家たちのほとんどが影響を受けている有名なホールで、戦略型設計の原型になったと思われる。ミス・ショットを罰するだけのハザードではなく、地形とハザードのコンビネーションが様々な攻略ルートを生み、考えるプレーを要求しているからである。

#### 対角線設計から英雄型設計の派生

『ノースベリック』は全英オープン・コースの『ミュアフィールド』に隣接するから15番ホールのハザードはバンカーとマウンドしかない。距離は190? 195ヤード、ナスビ型のグリーンがプレー・ラインに対して右手前から左奥にかけての斜めに置かれ、左手前に深いバンカー。グリーン右にマウンドがあり、その勾配がグリーン・アンジュレーションに生きているので、左奥へ傾斜する。グリーン右には3つのバンカーもからむ。これだけの設定で、多彩な戦略性を喚起させるのだ。

まず、注目すべきは斜めのターゲット。近代になって、多くの設計家が提唱する“対角線設計”という方式を考え出す元になった。旗が左に立つ場合、バンカー越しに直接ピンを狙うか、グリーン右手前のエプロンを狙って迂回するか、の二者択一を迫られる。

つまり、戦略型設計の基本精神がここにある。

また、バンカーをキャリーで越すルートは危険だが、もし距離の正確な判断とスピンの利いたボールを打てれば、ピンに寄る確率が高い。ジョージ・トーマスの造語、“危険と報酬 (Risk & Reward)” という設計思想の原点ではないだろうか。これが英雄型設計の始まりともいえるだろう。

ハリー・コルト&チャールス・アリソン (Harry Colt & Charles Alison) の共著 “Some Essays on Golf Course Architecture” (1920 年刊) でも、さかんにこのハザード越しのルートと迂回ルートの戦略性を説いている。危険なハザードをキャリー・ボールで越すことを “バイト・オフ (Bite-off)” と表現したのもコルトで、斜めに置かれたハザードを大きく越すか、浅く越すかでルートが変わる意味を含んでいる。危険エリアをショットで “食いちぎる ” という感覚なのだろう。より大きく危険を克服すれば、報酬も大きいという現代的な設計概念を内包している。

この英雄型設計をスケール大きく展開したのが R・T・ジョーンズ・シニアだが、彼はこの “レダン” にゴルフの本質を発見しているほどだ。「このホールはプレーヤーの技量と同時にゴルフのセンスを問う設定で、ルートを選ぶ際の決断と自己の能力分析を要求している。自分にとって最適なショットを引き出すための感情コントロールこそ、ゴルフにまつわるすべてのエッセンスだからである」(At this point the player must marshal his sense, using the most object analysis of his abilities at the moment to decide which route he is going to take. Having made that decision, he must be in complete control of his emotion in order to pull off the shot. This is the essence of what golf is all about. )

また、英雄型設計の教科書としてよく引用されるのが『ミッド・オーシャン』(マクドナルド設計、1924 年設立) の 5 番ホール “岬 (Cape)” だろう。湖越しに、斜めに横たわるフェアウェイをティ・ショットで狙う設定はあきらかに “対角線設計” のパターン。だから、“レダン” のバンカーが巨大なウォーター・ハザードに変わっただけと見られないこともない。

どうもスコットランド・リンクスには少ないウォーター・ハザードをさかんに導入するようになる米国の設計家たちの活躍した時代に、英雄型設計は花開いたようだ。

科罰型設計の最高峰と言われる、『パインバレイ』(Pine Valley) は理想的な土地素材に巨費を投じた成果だが、アマチュア設計家のジョージ・クランプ

(George Crump)には素晴らしいアドバイザーが集結した。コルト & アリソン、マッケンジー、トーマスとそれこそ当時の設計実力者がクランプの死後も手助けして完成させたものだ。

だから、ペナル・パターンばかりではなく、ウォーター・ハザードを導入した戦略性も多分にあるのが実情だ。有名な5番、パー3ホールは“神のみぞパーが取れる”と言われるが、グリーン位置を決めたのはハリー・コルトで、よく見ると“レダン”のバリエーションでもある。

このように、斜めに置かれたターゲットに対して、危険なゾーンをキャリア・ボールで越して打つことを要求するこのパターンが普及して米国のコース設計は百花繚乱になるのである。

ジョージ・トーマスがカリフォルニアへ来て『リビエラ』(Riviera)を設計したのは1927年、4番ホールに“レダン”を最も現代的に再現している。このホールとオリジナルをふたつ比較して見ると、設計の歴史的系譜がひと目で明らかになるようだ。ベン・ホーガンが初めてプレーして気に入ったあまり、ティから25個のボールを打ちまくったというエピソードがある。そして「アメリカで最も偉大なパー3だ」と言ったらしい。

マクドナルドからコルト & アリソン、マッケンジー、トーマス、ティリングハースト、ロスなどが活躍した米国の1910? 35年までを“コース設計の黄金時代”と呼ぶが、設計思想の本流もこの時代に確立されたようである。もちろんそこには米国社会の産業革命があり、コース建設にも人力から大型機械化、ゴルフ人口の増加とあいまって新設コース・ブームが到来したという条件も加味している。1916年には742コースだったものが1930年には5,691コースへと急増した事情もある。だが、これほど優れた才能が輩出した時代も珍しい。その証拠には、現在行われている“アメリカの偉大なコース100ランキング”などで高い評価を得ているのは、ほとんどこの時代のコースなのだ。

ということは、“古きを訪ね、新しきを知る”という温故知新の精神がゴルフには必要なかもしれない。心ある設計家たちは古典的コースに学び、そのバリエーションを時代に合わせて創作しているのだから。

最近の米国では、再びリンクス・スタイルのニュー・コースが話題を呼んでいる。B・クレンショー (Ben Crenshaw) の『サンド・ヒル』(Sand Hill) やピート・ダイ (Pete Dye) の『ウィスリング・ストレイツ』(Whistling Straight) などだが、それは単なるコピーではなく、リンクスの魂にモダンな変化を与え

た設計なのだ。

日本に『広野』を残したC・H・アリソンはこう言う。

「コースのプランニングには従うべき固定的制約はないが、結果として生まれたバラエティこそこのゲームの最大の魅力のひとつだ」( In planning a golf course there are no fixed rules to which is the compulsory to conform, and variety which results is one of the greatest charms of the game. )

The Roots of the Heroic School

Tadashi Nishizawa

Golf Journalist

Golf course architecture may be reduced in its essence to a battle between designer and contours. Although golf courses are fields of play made by man for a ball game, they should nonetheless look as natural as if they had existed since ancient times. The term “ contour ” refers to the outline of the terrain, and it can also be used as a verb in the sense of building a path following the lie of the land. A course architect has the obligation to create a space that will provide authentic golfing pleasure, and this he must do by making the most of the terrain.

When planning a course, does the architect have in his mind a variety of holes in their completed form?

It seems to me that the number of basic patterns of holes capable of pleasing and challenging players is not, in fact, very large. It would be more accurate to say that numerous variations are developed from a small number of basic patterns, depending on the nature of the terrain. This is why architects need to have a good knowledge of the game's essential features and technical aspects in their struggle with the contours, both when working at the drawing table and when getting their shoes muddy at the construction site.

What architects hope to achieve in their fight with contours is “ strategic

design.” This means striving at all times to create holes that can give maximum pleasure to the greatest number of players.

Historically, the oldest design concept is that of the “penal school,” followed by the “strategic school” from which the modern “heroic school” is derived. A good course, it is believed, should include a mixture of these three concepts. It is the purpose of this essay to trace the roots of the “heroic school.”

Analysis of “Redan”, the Most Frequently Copied Hole

“Strategy is the soul of the game. The spirit of golf is to dare a hazard, and by negotiating it reap a reward,” said George G. Thomas, the designer of Riviera and Belle Air. He was not the first American to be familiar with the concept of strategy, even though it would still be some time before golf in the U.S. could be considered to have made its real debut.

At the end of the 19th century when U.S. golf was still in its infancy, course architecture could literally be described as being a fin-de-siecle phenomenon. Many of the courses created in those years would look quite absurd from a modern viewpoint. They included, for example, rectangular greens of the so-called geometric design, clusters of conical-shaped mounds called “chocolate drops,” and blind holes that bunkers with mounds prevented the players from seeing. Old photos of such features now make us laugh. The most popular contemporary architect incorporating such designs in his work was Tom Bendelow, who made a fortune travelling by car from town to town, carrying all his belongings with him. It seems that he had a fine Scottish accent, which helped him get a steady succession of designing jobs.

This story gives us some idea of the state of U.S. course architecture at the turn of the century, when most courses were laid out on a more or less trial-and-error basis without reference to any specific design concept. The model, however, was always Britain. British professionals and architects came to the U.S. to work, while Americans went to Britain to study golf architecture—the pioneer among these being Charles Blair

Macdonald.

Born to a wealthy family, Macdonald was sent by his father to study at St. Andrews University, Scotland. There, he was introduced to golf by Tom Morris. Back in the U.S., he did a great deal to popularize the game: he was instrumental in forming the United States Golf Association (USGA) and establishing the United States Amateur Championship. But his greatest interest was always course architecture. In 1911, he laid out the National Golf Links of America on Long Island, New York. As he states in his "Scotland's Gift: Golf," all 18 holes of the course were recreations of celebrated links holes, or were modeled on them. In other words, his design concept was based entirely on links holes which, as a man of insight, he knew to be the origin of strategic holes.

This concept was shared by Scottish architect Alister Mackenzie who paid the following tribute to Macdonald: " American golfers owe a debt of gratitude to Charles Blair Macdonald, who was not only the first United States Amateur Champion but the father of golf architecture in America. " When he was still a member of St. Andrews Golf Club, Mackenzie studied the Old Course closely, making a survey map of the course based on actual measurements and trying to find the best routes to attack the respective holes. These experiences were largely responsible for his favoring strategic architecture. He turned to course architecture from his career as a doctor after winning first prize in a design competition for an ideal hole. The terrain he had in mind when making his prize-winning design was the site at which Macdonald was planning to build the Lido. This shows that the two men shared a keen interest in the strategic dimensions of links holes. It is reasonable to assume, therefore, that Augusta National, which Mackenzie designed jointly with Bobby Jones in his later years, was a result of his desire to " recreate a classic links course in a wooded area. " . The best-known of Mackenzie's reproductions of British links holes is probably the 4th of National Golf Links, in which he embodied the features of " Redan, " the par-3 15th of North Berwick West Links located in East Lothian, near Edinburgh. A celebrated hole that has continued to influence



course designers past and present, “Redan ” is regarded as the prototype of strategic architecture. The hazards are not there just to punish bad shots, but rather, the combination of hazards and natural terrain creates the possibility for various alternative routes, challenging the player to come up with a well-considered response.

#### Development of the Heroic School from Diagonal Design

The hazards of North Berwick's 15th, “Redan, ” consist only of bunkers and mounds as the course is adjacent to Muirfield, a venue for the British Open. It is a 190-195 yard hole, with an eggplant-shaped green positioned diagonally from right to left with respect to the line of play and a deep bunker short of the green on the left. Under the influence of the slanting mound on its right, the green slopes away toward the left and the back. There are also three bunkers to the right of the green. This arrangement makes the hole strategic in a variety of ways.

The most notable feature is the diagonal target—this is the origin of the “diagonal design ” system favored by many modern architects. When the flag is placed in the left part of the green, you have a choice of either going directly for the pin beyond the bunker or taking a more roundabout route by aiming at the apron on the right in front of the green. This is quintessential strategic design.

Trying to carry the bunker is a risky choice, but with good judgement of distance and adequate spin, you have a reasonable chance of lying close to the pin. This, I think, is the starting point of the “ risk and reward ” strategy originated by George Thomas.

The significance of the strategic dimensions of the 15th in offering alternative routes—to carry the hazard or play round it—is also discussed in detail in “ Some Essays on Golf Course Architecture, ” a joint work by Harry Colt and Charles Alison published in 1920. Colt was the first to use the term “ bite-off ” to describe a full carry over a dangerous hazard. The term suggests that the route to be taken after your tee shot depends

on whether it has fully or barely carried the diagonally set hazard. It also evokes the modern design concept of the bigger the risk, the greater the reward.

This type of layout, which is referred to as the heroic school of architecture, was developed and widely adopted by R. T. Jones, Sr., who sensed the essence of the game in "Redan." He comments, "At this point the player must marshal his senses, using the most objective analysis of his abilities at the moment to decide which route he is going to take. Having made that decision, he must be in complete control of his emotions in order to pull off the shot. This is the essence of what golf is all about." "Cape," the 5th hole of Mid Ocean (built in 1924 to Macdonald's design) is often described as an exemplary model for the heroic school. The layout clearly belongs to "diagonal design," demanding a tee shot across a lake to a diagonally positioned green. "Cape" may be regarded as a "Redan" whose bunkers have been replaced by a huge water hazard.

The heroic school appears to have flourished in the heyday of U.S. architects who incorporated water hazards extensively in their design, although these were rarely found on Scottish links courses.

Pine Valley, regarded by many as the most outstanding example of the penal school of architecture, was the outcome of a huge sum of money invested in an ideal terrain. It is the work of amateur architect George Crump, whose advisers included top architects of the time such as Harry Colt, Charles Alison, Alister Mackenzie and George Thomas. They helped in the work of completing the course after Crump's sudden death.

Reflecting the influence of the above-mentioned advisers who favored strategic design, the course basically follows the penal pattern but also has numerous strategic features such as water hazards. People say that, "only God can make par" on the famous par-3 5th of this course. It was Harry Colt who decided the position of the green. A closer study of the hole will reveal that it is actually a variation of "Redan."

With the spread of this style of architecture that required players to carry a hazardous area to a diagonal target, U.S. course design flourished in

terms of both variety and quality.

George Thomas came to California to lay out Riviera in 1927. In the 4th hole of this course, he reproduced "Redan" in its most modern form. A comparison of these two holes is a good indication of the historical trend of course architecture. The story goes that Ben Hogan was so happy with the 4th when he played it for the first time that he fired off 25 balls from the tee, exclaiming, "This is the greatest par three of American golf!" The period in the U.S. from 1910 to 1935 when designers such as Macdonald, Colt, Alison, Mackenzie, Thomas and Tillinghast were active has been called the "golden age of course architecture." The mainstream of golf architecture may be considered to have been established during this period. We must also remember that it coincided with America's social-industrial revolution that changed the method of course building from man power to machine power, and also that it saw a boom in new course building resulting from factors such as the increase in the golfing population. Indeed, the number of courses rose from 742 in 1916 to 5,691 in 1930. This was undoubtedly a unique period that produced many superb architectural talents. Evidence of this is the fact that most high-ranking courses such as those mentioned in "America's 100 Greatest Courses" were built during these years.

Perhaps this means that golf needs to become more adept in learning its lessons from the past. Intelligent architects learn from great classic holes and create variations according to the needs of the time.

Recently, new courses in the classic links style such as Ben Crenshaw's Sand Hill and Pete Dye's Whistling Straights have been creating sensations in the U.S. It should be noted, however, that these are not mere copies: although they incorporate modern features, they retain the soul of classic links courses.

C. H. Alison, a British architect whose work in Japan included the Hirono course, commented, "In planning a golf course there are no fixed rules to which is the compulsory to conform, and variety which results is one of the greatest charms of the game."